

或るコンビニ店員のお話

矢崎あか

夜遅くのコンビニのバイトというのは退屈なものだ。向かい側に駅があるため、電車の到着時刻に合わせてちらりほらりと客が訪れるが、それほど大きな駅でもない。それ以外はほとんど無人である。

月曜、水曜、木曜の二十二時から翌日の五時が俺のシフトだ。このバイトは大学に入ってからすぐに遊ぶ金ほしさに始めた。あれから一年半が経ち、掛け持ちのバイトを増やしたり辞めたりを繰り返していたが、このバイトは辞められない。深夜のバイトは、時給がいい。バイト明けの午前中は授業を入れていないので、昼まで寝てから大学へ行く。生活のリズムは崩れがちになるが、こんな生活をしていても体調を崩さないのは若いうちだけだ。と開き直っていた。多少の無茶も、「若いうちだけ」の一言で押し通せるものだ。

この時期になると夜は蒸し暑さもすっかり消え去り、肌寒くなってきた。レジの目の前にはおでんがほくほくと湯気を立てている。

電車が到着し、発車する音が聞こえる。もうすぐ客が何人か入ってくるだろう。そして、それらの人々を捌き終えた頃、あの人が入ってくるのだ。

ガタン

「いらっしゃいませ」

ドアが開いた音に対して反射的に声を出して顔を向けると、俺の待ち望んでいた人。

モカのテラードジャケットに胸元に控えめにフリルのついたオフホワイトのブラウス、ブラウンの膝丈ブリーツスカート、低いヒールのパンプス。清楚で清潔感のある恰好ではあるが、暗い表情と適当にくくられた髪や、肩からかけられた大きなバッグから覗く大量の書類がいかにも疲れた〇〇を物語っている。

彼女はまっすぐに弁当コーナーに向かった。俺はその様子をちらちらと見ながらレジの整理をしているふりをする。

彼女はしばらく陳列棚を物色したあと、お目当ての品を持ってレジにやってきた。レジ台に置かれた豚肉の生姜焼き弁当と小さめのサラダの会計を済ませる。彼女はいつもこんな風に、弁当とサラダを購入していく。

「お疲れ様です」

俺に声をかけられるとは思わなかったであろう彼女は、少し周りを見渡してから「私？」と言った。

「いつも、夜食を買っていくようだったのね」

「あら、覚えられていたなんて。なんだか恥ずかしいですわね」

彼女は言葉通り、恥ずかしそうに顔を染めた。

「毎日残業で、夕食を作っている余裕がないんです。それじゃあ、あなたもお仕事頑張ってくださいね」

俺からビニール袋を受け取った彼女は会釈して店から出て行った。

俺が彼女の存在を認識したのは、ある、雨のたくさん降っている夏の日のことだ。その日は雨で床が滑りやすくなっていた。そこへ杖をついた足の悪そうなおばあさんがやってきて、転んでしまった。近くにいた別の客が小さく舌打ちをした。レジから俺が出ていこうとしたとき、ちょうど店を出ようとしていた彼女がおばあさんに手を差し伸べたのだ。「だいじょうぶですか」と声をかけておばあさんを起こし、杖を渡してそのまま帰って行った。

転んだ人に声をかけることくらい親切さは皆が持ち合わせていると思いたい。が、実際は避けて通ってしまう人が大半だ。舌打ちをする人さえいる。そんな中、優し

い人もいるものだな、と思ったのだ。最初は、それだけだった。次のバイトのときにも、彼女は現れた。確かその時も、何かのお弁当とサラダを買っていたと思う。意識していると彼女は相当な頻度で俺のシフト中に現れるようになった。

ずっと見ていた、なんて言うストーリーカーのようで嫌だけれど、ずっと気になっていたのは確かだ。

俺のシフトじゃないときにもよく来るのだろうか。毎日夜が遅いのだろうか。こんな食生活で体を壊したりしないだろうか。

彼女に会えると思うとこの深夜のバイトを待ち遠しく感じている自分がいた。今日話しかけようと思ったことに深い意味はない。いつか話しかけてみたい。そう思っていた。大学の講義を終えて喫茶店に立ち寄って、いつもは苦いからと頼まないコーヒを頼んで飲んでみたら案外美味しく飲めた。だから、今日声をかけてみよう、と思った。それだけだ。

次のバイトのときにも彼女はやってきた。レジに親子丼とサラダを置いて俺の顔を見るとまた彼女は恥ずかしそうに笑った。

「この前は豚肉の生姜焼きなんて買ってるところを見られちゃったので」

「今日は親子丼ですか」

「はい」

「もしかして、毎晩コンビニ弁当だったりするんですか」

「お恥ずかしながら。ちゃんとお料理しなきゃ駄目ですよね」

「体に悪いですよ」

「どうも要領が悪くて。社会人になってもう半年も経つんですけどね」

ガタン、と扉が開く音がして客が入ってきたのを見て、彼女は「それじゃあ、失礼します。お仕事頑張ってください」と言いつて帰って行った。

それから彼女は頻繁に訪れた。そして、弁当とサラダを買って、他愛のない話をする。たまに豚肉の生姜焼きだったり、こんな時間には重いんじゃないのかと思うような弁当を「食べたかったですもん」と恥ずかしそうに買っていく姿が可愛く思えた。しかし心配なのは彼女の食生活だ。

「一応サラダも買ってるみたいですけど、それだけじゃ駄目ですよ。コンビニ弁当ばかりじゃ本当に体に悪いです。もっと早く家に帰れたりしないんですか？ 休みの日に作り置きしておくとか」

「うーん、難しいね。善処はするよ」

彼女は次第に敬語を取って接してくれるようになってきた。

善処はするといったものの、相変わらず彼女はコンビニに通ってくる。一回会って会話する量なんてほんの数分の限られた時間しかないが、それが積もってくると、彼女についてもだんだんわかってきた。

彼女は今年度入社したばかりの新人OL。大学入学時に始めた一人暮らしのアパートにそのまま住んでいるため、会社からは少し離れている。料理は嫌いじゃないが、あまりうまくはない。朝が弱い。趣味は読書、映画観賞、カフェ巡り。

「朝ごはんはね、ごはん、お味噌汁と、納豆。お昼は、たまに外に食べに出ることもあるけど、だいたい会社

の食堂かな。あんまりおいしくないんだけどね」

「朝ごはん……」

「あ、おばあちゃんみたいって思ったでしょう。栄養あるんだからね、納豆」

「いや、一応健康には気を遣ってるんだなと思っただけです」

「一応、ね。ごめんなさいね、毎晩コンビニ弁当で。私みたいなお得意様がなくなったらあなたの給料なんて一気に減額なんだから。いつか私にお料理する余裕ができたら覚えておきなさいよ」

いたずらっ子のように笑った彼女が手を振って帰ろうとしたところを、引き留めた。心臓の鼓動が、少しだけ速くなる。

「どうしたの？」

「今週の土曜日あいてますか」

「今週の土曜日？ どうして？」

「久しぶりに映画を観たくなったので、一緒にどうかと思ってる」

「申し訳ないけど今週末も仕事かな、月末だし。来月に入っちゃっても構わないなら、来週の土曜日はどうかな」

「問題ないです。じゃあ、来週の土曜日、あけておいてください」

「了解です。じゃあ、お仕事頑張ってください」
俺が彼女に声をかけたときは肌寒い程度だったが、今ではすっかり冬らしくなり、彼女の装いも冬のものとなっている。

次の週の土曜日。女性と二人で出かけるのは初めてで

はないが、柄にもなく緊張していた。普段はコンビニの制服を着ているから気にしていなかった洋服にも気を遣った。白いシャツに深緑のカーディガン、ベージュのチノパン。寒さには強いほうだが、さすがに十二月にもなると冷え込むので、紺色のショートダッフルを羽織った。

待ち合わせの十分前に着いたはずなのに、彼女はもうそこにいた。

「すみません、もしかして俺、時間間違えました?」

「ううん、違うの。仕事の癖で、新人だから待ち合わせには一番に行かなきゃって思っちゃって。でも、私もさっき来たばかりなの。えらいね、十分前集合。大事だよ」

彼女はにっこり笑ったが、俺は少しショックを受けていた。彼女より早くに来たかった、とかそういうことだけじゃない。俺は、彼女のブライベートにはなれなかったのだろうか?

少し沈みかけた気持ちだったが、改めて彼女を見てみると、いつもの大人びた洋服とは雰囲気少し違う。ファティーペットがついたベージュのAラインコートを着て、ひざ下で折り返したブラウンのロングブーツを履いている。いつも無造作にまとめていた黒髪はハーフアップにしていて臙脂のリボンでとめられていた。

「今日、いつもと雰囲気が違いますね」

「いつもは通勤のときの服だからね。もしかして、今日みたいな似合わないかなあ」

「いや、そういうわけじゃなくて、ただ、いつもと違って可愛い。と思った。けれど、さらっとそんなこと言ってしまうたら軽い男だと思われるかな、なんて、今まで全く思わなかったようなことが頭をよぎって、結局言え

なかった。

「映画、今観たいのありますか?」

「うーん、先々月末に公開になったアクション映画とか、ちょっと気になるかも。人気がないだし」

「アクションですか? 意外ですね」

「結構アクション映画好きなの。でも、あなたが何か観たいのがあって来たんじゃないの?」

「いえ、特に。映画なんて滅多に来ないので。おすすめの商品をお願いします」

「おすすめって言われてもなあ、最近チェックできてないし……。じゃあ、そのアクション映画観ようか」

映画館に着くと上演時間まであと少しだったので、急いでチケットを買って場内に滑り込んだ。公開されてからだいぶ経ったからか観ている人はまばらだったので、観やすい位置に座ることができた。コートを脱いだ彼女は小花柄のワンピースを着ていて、腰元を細いベルトで引き締めている。やはり、仕事のとときは区別をつけてきてくれたのだ、と思うと先ほど少し重くなった心がふわりと浮かんだ気がした。

「映画が始まる前のコマーシャルの時間って結構好き」

スピーカーから流れる大音量に声がかき消されないように、彼女は俺の耳音に顔を寄せて、声を張った。

「もどかしかったり、しないですか」

「わくわくして待ってる時間も、好きなの。映画館にいる時間全部を楽しめるでしょ」

俺が彼女の言葉に返事をする前に、映画の本編が始まってしまい、彼女は前を向いてしまった。ああ、残念だな、もっと見ていたいな、なんて。

映画は評判に違うことなく面白かった。映画館を出て

すぐに感想を言おうとする彼女を制する。

「すぐそこに、お洒落な喫茶店を見つけたんです。そこに行つてからにしませんか。少し時間はずれてしまったけど、まだぎりぎりランチの時間ですし」

「あら、気が利く」

喫茶店は、歩いて五分もかからない。道中、彼女が映画の話をしたくてもうずうずしている様子が一目でわかった。

「わあ、かわいい喫茶店」

人通りがあまりない奥まったところにある喫茶店だが、事前の下調べによると女性に人気の店らしい。満席でなないかと心配したが、時間が中途半端なのでどうやら大丈夫そうだ。

小さなドアを開けて中に入ると、女性客が数グループいるだけだった。いらっしやいませ、という声と共に奥から俺と同じ年くらいの女の子が出てきて、席に案内してくれた。

壁に張られた麻の紐に木製の洗濯バサミでイラストがクリップされていたり、木箱に洋楽のCDがディスプレイされている。

「本当に、外国の絵本に出てきそうなお店。こういうところによく来るの?」

「いえ、たまたま見つけたんです」

「ふーん……。ありがとね」

「……いえ」

彼女には、俺が必死でリサーチしたことなんてお見通しだったようだ。こんな裏道にある喫茶店をたまたま見つけるわけがないのだから。

「メニューです、どうぞ」

「ありがと」

キルトで作られたブックカバーのかかったメニューを手渡すと、彼女はにこにこしながらメニューをめくった。「何にしようかなあ」

ゆつくりとメニューを眺めた彼女はエビとアボカドのクリームパスタとハニー&レモンのフルーツティー、俺は焼きナスのカレードリアと本日のコーヒーを頼んだ。「でも、こんなにかわいいお店があったなんて、ちょっと感動」

「好みが別れるかと思ったんですけど。もっと大人っぽい雰囲気のお店でもいいかな、とか」

「大人っぽいところも好きだけど、こういうところも好き」

「それなら、よかったです」

それほど混んでいないため、ドリンクが来てから程なくして料理も運ばれてきた。

いただきます、ときちんと手を合わせてから食べ始める彼女を見て、やはり彼女は当たり前のことを当たり前にできる人なんだな、と思う。

「おいしい……」

飲み込むのが待ちきれなかったというように、もぐもぐと動かす口を手で押さえながらにっこり笑う彼女を見ていると、来てよかったと思える。俺のドリアもたしかに美味しかったけれど、ずっとこちらが見ているだけの存在だった彼女が目の前にいて、俺を見てくれていていると思うと、それだけで充分すぎるほどに幸せを感じた。

「映画の感想は、いいんですか」

暫くドリアに夢中になっていた彼女は一拍間を開けて、くすりと笑った。

「忘れた。この店があんまり素敵なんだから」

店内をきよきよと見回してかわいいかわいいと連

発したり先ほどの映画のあの俳優のあのシーンがとも格好良かったと身を乗り出して話す姿は、平日に会う時とは違って少し子供っぽくて、少しは俺に心を許してくれたのかなと思った。年上の女性に子供っぽいだなんて失礼なのかもしれないけれど。

ごはんを食べた後、デザートも食べていいんですよ、と言うとおずおずと「生チョコ焼きをください」と言っていた。運ばれてきた生チョコ焼きは、ココット皿に入っていて、上は生クリームと木の実を使ってにっこりしたかわい顔が描かれている。

「食べるのがもったいないなあ」

そつとスプーンを入れて生チョコ焼きを食べる彼女を、おかわりしたコーヒーをすすりながら眺める。

「食べる？」

「え？」

目の前の皿を指さしながら問いかける彼女に、「あーん」か？と胸を高鳴らせたが、お皿とスプーンを渡されて、少し残念だった。まあ、実際のところ、こんなものなんだろうな。

会計の時に、少し揉めた。

「俺が出しますよ」

「駄目だよ、年下に払わせるなんて出来ない。私が出す」

「俺だって一応バイトして稼いでるんですよ」

「私は社会人で、あなたは学生よ」

「あー、じゃあ、自分の食事は自分で出します」

「んー、それなら、まあ、いいかな」

「でも、デザート代は出させてください」

「意外と強情だね」

「お互い様です」

申し訳なきそうにする彼女からごはん代だけを受け取って会計を済ませた。

帰り道、俺は彼女の言葉に相槌を打つことしかできなかった。次に会うときはただのコンビニの店員と客なのだろうか。たしかに以前よりは距離もぐつと縮まっているだろう。それでも、俺は欲張りだった。俺はこんなに余裕がなくて格好悪い男だっただろうか。

仏頂面で満足に返事もせずに歩く俺を不審に思った彼女が、「どうしたの？」と聞くのと、俺が「あの、」と声を上げるのは同時だった。

「え？」

「あの、」

「うん」

一度出かけた言葉は、止まらない。

「また、コンビニには来てくれますか」

「え？ あなたの働いてるコンビニに？ もちろん、行くよ。あのコンビニにはお世話になっているもの。恥ずかしい話だけど」

「そこでは、俺たちは、ただの店員と客ですか」

「……。どういう意味かな」

俺は彼女の顔が見れなかった。彼女の声は淡々としていて、そこから何の感情も読みとれない。どんな表情を浮かべているのだろうか、と思ったけれど、彼女は今とても困っているに違いない。そんな顔を見たら、俺はきつと何も言えなくなる。彼女を困らせたかわいじゃない。けれど、俺はどうしても言いたかった。

「俺は、嫌です」

「うん」

「ただの店員と客は、嫌です」

「うん」

彼女は相槌を打って、くすりと笑った。

「それで？」

「え？」

「ただの店員と客の関係が嫌なあなたは、私に何を言ってくれるの？」

ようやく彼女の顔を見ると彼女はあのいたずらっ子の
ような笑みを浮かべていた。「君の言いたいことはわかっ
てるよ、ほら、言っごらん」と言っているようだった。
この人には、かなわない。

さつき喫茶店で飲んだ本日のコーヒーはおいしかった
な、と頭によぎった。

足を止め、彼女の方に体を向ける。彼女も、足を止め、
俺の方に体を向ける。

「好きです。俺と付き合ってください。」

彼女の返事がどんなもので、俺たちの関係がどうなっ
たのかは言わないでおく。ただ、彼女を家まで送って行っ
た俺は別れ際に「あなたもこの曖昧な距離感をもう少し
楽しんでおきたいのかと思っただけだな。余裕ぶって
るくせに意外とせっかちなんだね」と笑われてしまうの
だった。